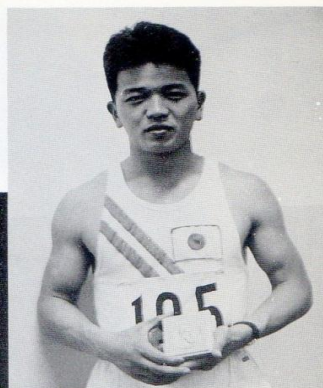


新 春高怪物列伝へ

★ 私があこがれる先輩たち

中学生くらいになって、陸上を始めたらたいいの選手が経験するだろう。いざ試合にいくと、いかに周囲には強い選手がたくさんいるかということ。さらに全国の決勝を目指すなど、奇跡に近い偉業であるかを。

日本記録樹立



後藤 均 (高5回卒、八幡製鉄勤務)
昭和33年5月19日 砲丸投日本新記録樹立 14m39.
昭和33年6月2日 第3回アジア大会の砲丸投で銀メダル獲得
今後の活躍を期待し祝賀会開催



中崎 孝 (高9回卒、リッカーマシン勤務)
昭和38年10月30日 第18回国民体育大会 (山口市) 3000m障害物に8分54秒2の日本新記録を樹立
昭和38年12月1日 祝賀会開催



考えてもみよう。高校生の初戦である東部地区で決勝に進み、県大会にたどり着くには例えば100mで11秒1、幅跳びで6m50cmが必要なのだ。一般に考えて100m11秒なんて出る速さではない。6mジャンプなんて、「クラスでは脚が速かった・・・」というレベルではすまない。さらに狭き門の関東大会やインターハイなぞ私にとっては聖域。数万人に一人の確率でしか到達できない奇跡なのである。

しかし、その超難関なインターハイに出場し、入賞、そして表彰台、優勝まで勝ち取る偉大なる先人たちが私の目の前にいる。



関東インターハイ総合8回優勝、インターハイおよび国体優勝9名のべ10回、高校新記録樹立、・・・まさに驚異的である。

しかし、OB総会で、偉大なる先輩たちの話に湧く16歳の少年たちをみて私はふと思った。

・・「ああ、この子たちは知らないのか・・・この偉人たちの話を・・」
私の中では当たり前の話だが、時代は流れ学生は幾度も代替わりしたことを痛感したのであった。

インターハイで優勝を争い、その後も箱根を制覇し、日本選手権を制し、アジア大会でメダルをとり、五輪を目指したOBの話を再び紐解かねばなるまい・・・

後輩として母校の先輩たちが成し遂げてきた、輝かしい歴史を知るのは必定。是非を問うまでもない。

10年ぶりに、「春高怪物列伝」を、ゆっくりとリメイクしていくことにした。

筆 37回 野本